凡夫伊能忠敬のこと

忠敬から少々のちのある地図製作者のことである。彼は、忠敬同様に仔細な日記を大量に残した。それには連日のように「日本図を写す」とあり、熱心に地図作成にあたるようすが見える。ところが、それと同じくらいに「酒を飲す」の文字が見え、あるときには「何某と同衾す」などとあって、ドキッとさせられる。その人、佐渡の柴田収蔵（一八二〇ー一八五九）は、長年の大酒がたたったのか蕃所調所の在職中に四十歳で亡くなる。

さて、伊能忠敬についても、こうした普段の姿に遭うことができないものだろうか。

まずは、伊能の常の評判や人つきあいはどのようなものかと、寛政十二年（一八〇〇）の千住宿から始まる出立時の様子を見る。送りの者には、佐原地頭の使いのもの渡辺某を初めとして、伊能三郎右衛門、同繁蔵、支配人鯉屋某、時計師弥五郎、佐原の柏屋某、柏木某といった役人から始まって親戚のものの名が見える。それどころか、時には伊勢屋某や大工某、畳屋某といった職人までが蕎麦屋に集まって、和気あいあいあと送る様子が見て取れる。天邪鬼には、これは面白くない。

そんなよくできた男忠敬は、生涯に四人の妻を娶ったことになっている。少なくても女嫌いではない。それならどこかに女遊びのひとつでも記述されていないかと目をやると。

寛政十二年四月二十三日の「測量日記」には、白河城下の旅籠因幡屋の女房に南鐐一片（二朱銀のこと）を渡したとある。一見真面目で通っている忠敬が、人の女房の気を引こうとしたのなら面白いのだが。

宿の主に身の上を聞いてみると、同郷佐原の出であるとか。そして故あって、夫婦で白河城下に流れて来たといい、これも何かの因縁と感じて、女房に心付けを渡したに過ぎないようである。

女房が四人なら子供も多い。実子だけでも、女子三人と男子三人、そのほかにも事情のある養子も幾人かいたようだ。当時の様子からすれば、この程度では子沢山とは言わないのだろうけれど、問題児のひとりぐらいいて親を悩ませるはずである。

忠敬が養子に入ったのは、よく知られた話。その時、伊能家には先夫の子忠孝がいて、そして長女稲が生まれた。ところが、前後してこの忠孝が亡くなる。

落胆する年上妻のミチをなだめるように、忠敬は故郷の九十九里の親友の甥である盛右衛門を迎えるのだが、これが忠敬の悩みの萌芽となる。

幼時には、佐原小野川のほとりで一緒に遊んだであろう八歳違いの兄妹。ゆくゆくは伊能家の跡取りとなるべき盛右衛門と実娘の稲とが、あろうことか恋仲になってしまうのだ。ある日、江戸鎌倉川岸（現千代田区内神田）にあった伊能家江戸店といったものを任されていた盛右衛門のもとへ、稲は走った。

生真面目な忠敬は、娘の心の変化に気づいていなかったのだろうから、心中はどのようなものであったろうか。

愛する娘を「勘当する」と言い出す。それだけではない、「身ごもった子を出産した後は離縁させる」とまでいっている。

しかし、「生まれてくる子に罪はない、孫の顔を見たいとは思わないのか」、「そんなに厳しく責めるのは、自分をせめていることにはならないか」と親友に厳しく諭されたものの、悩んだ忠敬は勘当に及ぶ。

忠敬の隠居江戸入りと前後して、盛と稲夫婦は故あって九十九里に引きこもることになる。

とはいえ、親子の絆というものは、そう簡単に切れるものではない。時はお互いの心を開かせる。文も身も往来を許すことになり、忠敬からは持病などに際して弱気な言葉が、稲からは父を想う温かい言葉が語られる。このような、老いてゆく忠敬が妙薫（稲は、盛右衛門の死後剃髪しこう名乗った）を心の支えにしたことや、彼女を佐原にやって孫の養育を任せたことなどは、よく知られていることである。

忠敬も、このようなごく普通の悩みを持つ人生を歩み、かつ、あの偉大な全国測量を成し遂げたことを思うと、私の心は安らかになる。